

# 小林市教育研究センター

I	研究主題と副題	.....	7-1
II	主題設定の理由	.....	7-1
III	研究目標	.....	7-2
IV	研究仮説	.....	7-2
V	研究構想	.....	7-2
VI	研究組織	.....	7-3
VII	研究内容		
1	系統的指導研究班		
(1)	基本的な考え方	.....	7-3
(2)	系統一覧表の作成	.....	7-4
(3)	T S Mの内容充実と活用方法	.....	7-4
(4)	研究の成果と今後の課題	.....	7-5
2	活用型授業づくり研究班		
(1)	理論的研究	.....	7-6
(2)	実践に向けた実証的研究	.....	7-6
(3)	研究の成果と今後の課題	.....	7-9
VIII	成果と課題	.....	7-10
○	参考文献	.....	7-10
○	研究同人	.....	7-10

## I 研究主題と副題

# 確かな学力を育成するための小林市ならではの授業の創造

小中一貫教育における系統的な指導の充実と知識・技能を活用する授業づくりを通して

## II 主題設定の理由

これからの社会は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」と言われている。この「知識基盤社会」の時代を児童生徒が主体的、創造的に生きていくためには、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。また、平成20年3月に告示された新学習指導要領でも、確かな学力を育成するために、基礎的・基本的な知識及び技能の習得とともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むことが重要視されている。

本県では、平成23年度に「第二次宮崎県教育振興基本計画」を策定し、施策の目標Ⅱとして「生きる基盤を育む教育の推進」を掲げ、その施策2に「確かな学力を育む教育の推進」が設定されている。その中で、確かな学力を育むために、指導方法・指導体制及び環境整備等の工夫・改善や小中高の一貫した取組等の推進と教員の指導力向上を図ることを重点課題としている。

これらの重点課題に対して、本市においては、その施策の一つとして、「知」・「徳」・「体」・「食」のバランスのとれた教育活動を推進することにより、自ら目標をもち、未来をたくましく生きぬく児童生徒を育成することを基本理念とした、連携型の小中一貫教育が市内全小中学校で実施されている。また、本市教育委員会では、「目指せ、宮崎県一、小林の学力」をスローガンの一つに掲げ、市内教職員が一丸となって日々の教育実践に当たっている。具体的には、「小林市授業力向上モデル委員制度の導入」「校内学力向上モデル委員の任命」「市教科別研究会の設置」「学力向上に向けた研究校の指定」等を行ってきた。

【表1】H23みやざき学力・意識調査（県比）

しかし、平成23年度みやざき学力・意識調査の結果を見ると、小学5年生では、国語科以外はすべて県平均を下回っていた。また、中学2年生においても、社会科以外は、すべて県平均を下回っている状況であった。【表1】

	国語	社会	算数・数学	理科
小5	↑	↘	↘	↘
中2	↘	↑	↘	↘

さらに、平成22年度の全国学力・学習状況調査の結果を見ると、小学6年生も中学3年生も、主として「活用」に関する問題（B問題）において全国平均をやや下回っていた。【表2】

【表2】H22全国学力・学習状況調査（全国比）

それぞれの平均を下回った原因として、できるだけ見届けがしっかりされないがために、積み上げが不足していたり、系統的な指導が十分行われず、基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図る指導やそれらを活用する学習活動が十分に行われてこなかったりしたことが考えられる。

	国語A	算数A	国語B	算数B
小6	↘	↑	↘	↘
中3	↑	↑	↑	↘

本研究センターでは、昨年度から、上記のような課題解決のために学力向上に視点を当て研究を進めてきた。まず、思考力・判断力・表現力等の土台となる基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図るための手立ての在り方に焦点を当て、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着のために指導内容の系統表（一部教科・領域）を作成し、学力の向上につなげる準備を行った。

そこで、小林市が、市における課題の解決を図るための重要な手法として、小中一貫教育を導入していることを鑑み、9年間を見通した系統性・一貫性のある学習指導を研究の基軸に据えて、系統的な指導の在り方について研究を進めることにした。また、平成23年度の研究の課題に、「思考力・判断力・表現力等についても関連させて研究を進めていく必要がある。」ということが挙げられていることから、知識・技能を活用する学習活動の充実を通して、授業を創造していくこととした。

具体的には、児童生徒に確かな学力を育成するために、昨年度作成した系統表のさらなる充実とその活用の在り方を究明するとともに、基礎的・基本的な知識及び技能を活用する学習活動を中核とした授業づくりを行い、理論研究から実際の指導に至るまでの手法や問題点を究明していくことにした。

以上のことを通して、児童生徒の確かな学力を育成する小林市ならではの授業を創造していくことを目指し、本主題を設定した。

### III 研究目標

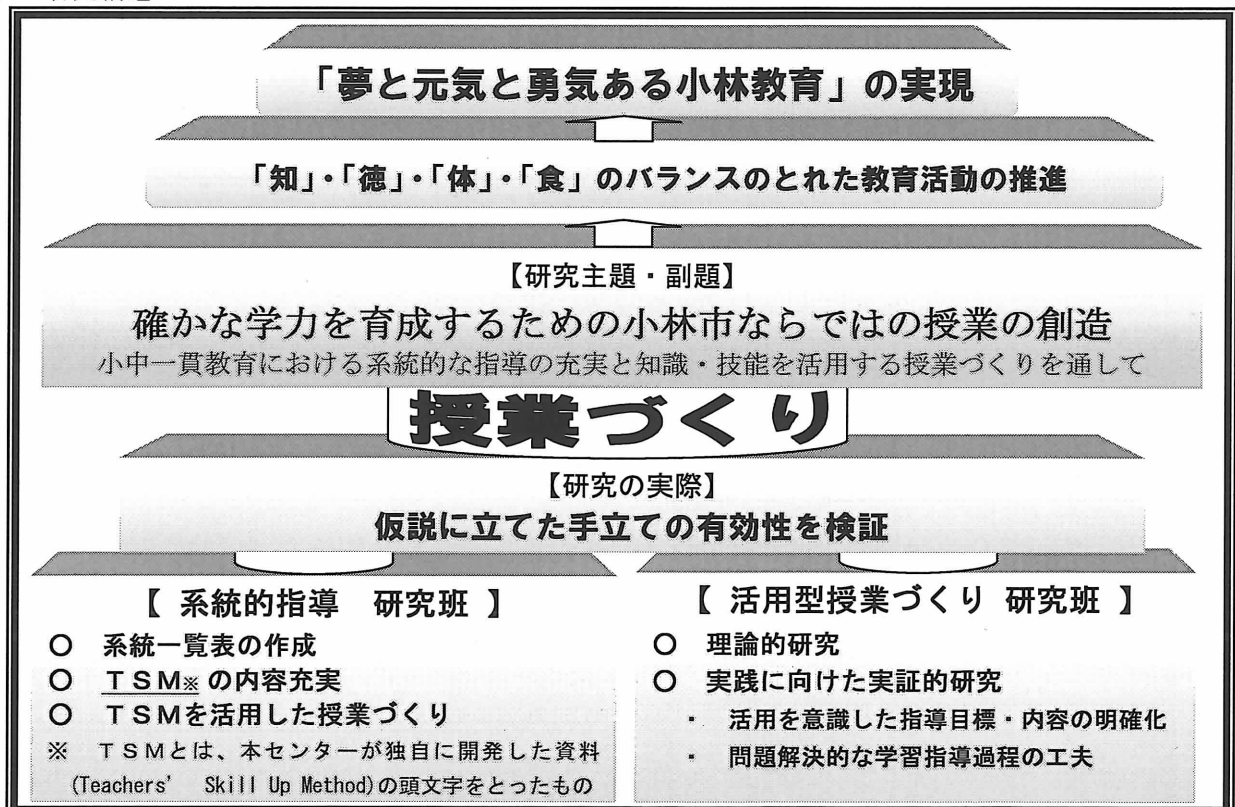
児童生徒の確かな学力の育成を目指して、小林市の児童生徒の学力の現状をとらえ、基礎的・基本的な知識及び技能を活用する学習活動を中核とした小林市ならではの授業を創造する。

### IV 研究仮説

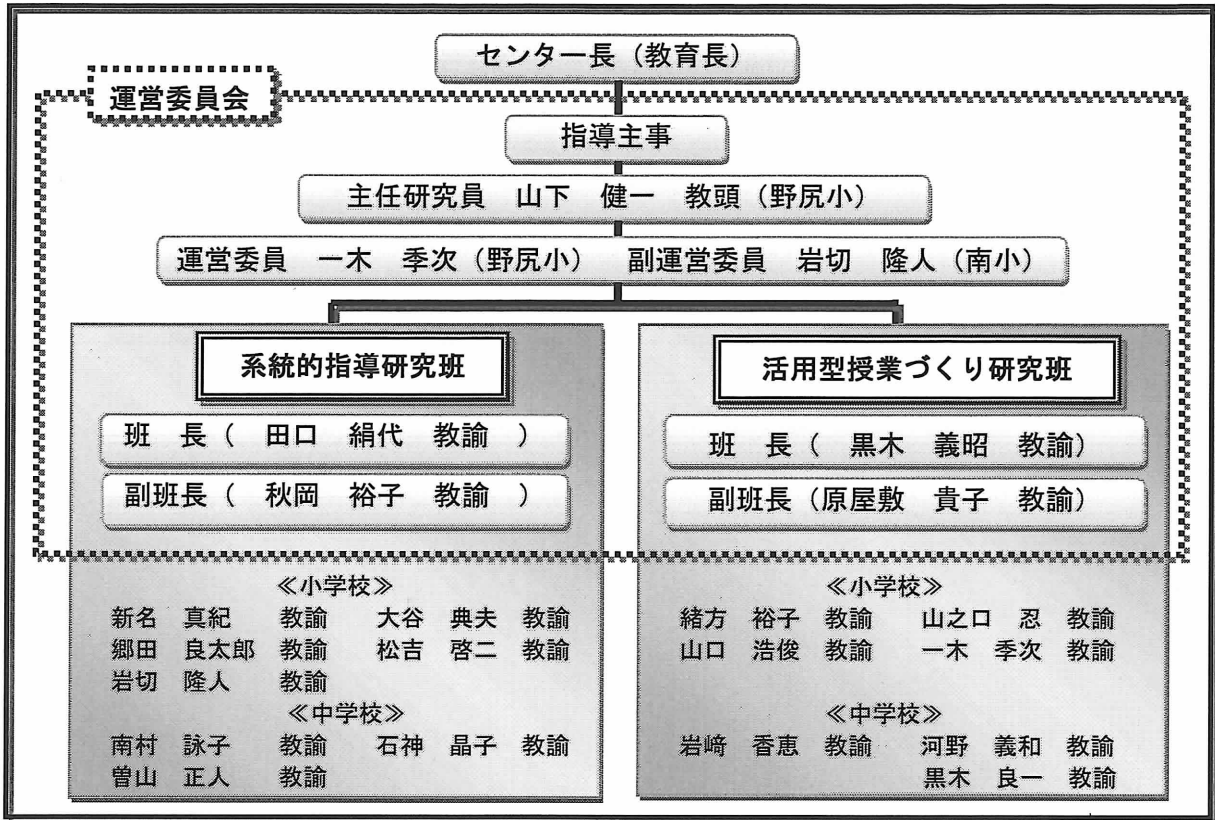
小中一貫教育における小林市ならではの授業の創造に向けて、次のような研究をし、実践につなげていけば、児童生徒の確かな学力を向上させることができるであろう。

- (1) 昨年度作成した系統表の改善とその活用
- (2) 基礎的・基本的な知識及び技能を活用する学習活動を中核とした授業づくり

### V 研究構想



VI 研究組織



VII 研究内容

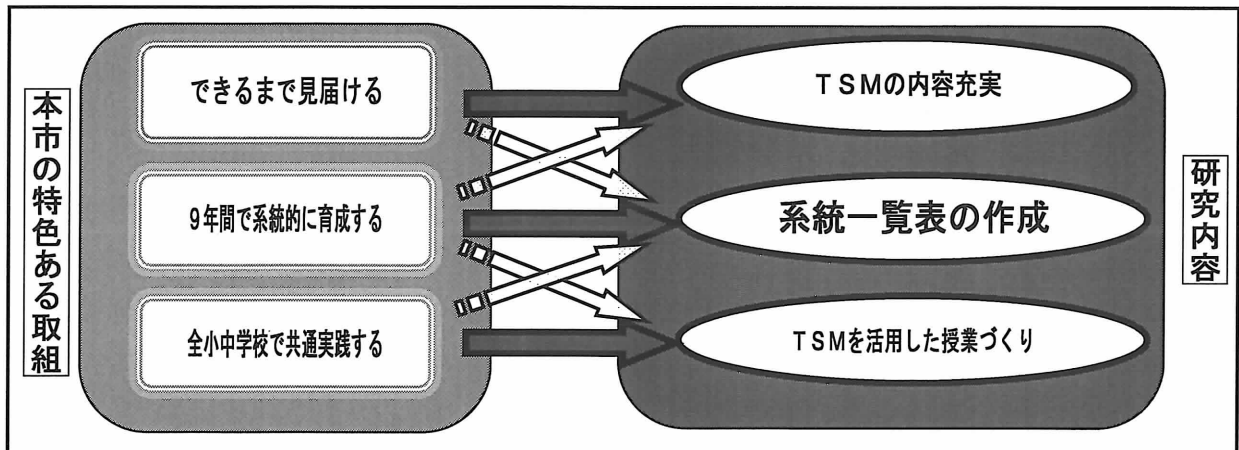
1 系統的指導研究班

(1) 基本的な考え方

本研究班では、昨年度、確かな学力の向上を目指して取り組んできた学力向上研究班の内容（「基礎的・基本的な知識及び技能」の確実な定着を図るための手立ての在り方、学習意欲・学習習慣に関する意識調査の実施・分析等）を踏まえて今年度の研究を進めてきた。特に、「①できるようにするまで見届ける教育 ②小中学校9年間で系統的に育成していく教育 ③小林市内の全小中学校で共通実践する教育」という本市独自の取組であるこすもす科の特性を生かして、今年度は確かな学力の構成要素である基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着のために、下のような研究内容に取り組んできた。

- 系統一覧表の作成 ○ TSMの内容充実と活用方法（授業づくり）

小林市の特色ある取組と研究内容の関連を整理すると、次のように表すことができる。



確かな学力の向上を図るためには、基礎的・基本的な知識及び技能を児童生徒にしっかりと身に付けさせることが必要であると考え、まず、本研究センターでは、各教科の基礎的・基本的な知識及び技能について整理するために「小林市の子どもたちの基礎的・基本的な知識及び技能」を次のように定義した。

【小林市の子どもたちの基礎的・基本的な知識及び技能】



次に、小林市の子どもたちの基礎的・基本的な知識及び技能の習得状況を把握するために、小林市全小中学校で実施している標準学力検査（NRT）の結果を活用することにした。その結果、国語科では、小学校の言語事項、中学校の言語事項と読むこと、算数・数学科では、小学校の図形と数と計算、中学校の図形領域に課題が見られた。そこで、その課題と考えられる領域に焦点を当てて系統一覧表の作成等に取り組むことにした。

## (2) 系統一覧表の作成

系統一覧表は、前述の定義を受けて、小中学校9年間で習得させる知識・技能を明確にして作成した。その際、①9年間を見通した内容の系統で整理すること②実施学年と指導月を明記すること③単元名とねらいを明記することの3点に留意し、指導者がその領域の系統を意識して授業を行うことができるようにした。【資料1】

【資料1 国語科の系統一覧表（一例の一部抜粋）】

国語 【言語事項（伝統的な言語文化）】 <単元・教材 系統表> 1～6年東京書籍		中1～中3 光村図書		H24		
◆は、言語事項に関わる指導内容		※→は漢字関連のつながり				
1年	2年	3年	4年	5年	6年	中1
<b>【字形】</b> 9月 かんじのはなし ◆漢字の成り立ち、漢字の正しい読み書き 1月 かたちのにているかんじ ◆漢字の形の似ているところ、違うところを探す	5月 かんじの書き方に気をつけよう ◆漢字の筆順と画数  <b>【読み方】</b> 2月 おくりがなに気をつけよう ◆送り仮名について理解し、送り仮名との関係調べ	6月 漢字の組み立てと意味を考えよう ◆部首の種類と漢字の表す意味	4月 漢字の読み方に気をつけよう ◆漢字の音訓や送りがないの理解 3月 漢字を使って読みやすい文を書こう ◆漢字のよさと漢字と仮名を用いた表記への関心	5月 漢字の由来に関心を持とう ◆漢字の由来と4つの成り立ち	6月 漢字の組み立てと部首 ◆漢字の組み立てと部首を理解 3月 漢字の成り立ち ◆漢字の成り立ちについて理解 11月 漢字の音訓 ◆漢字の音と訓について理解	
<b>【意味】</b> 9月 かぞえた ◆1～10の漢数字の読み方と書き方、助数詞		2月 漢字の表わす意味を考えよう ◆同じ漢字の複数の意味の理解	2月 同じ読み方の漢字に気をつけよう ◆漢字の意味と同音・同訓の漢字の使い分け	6月 熟語の構成を知ろう ◆二字熟語の構成と5つの熟語の理解	4月 熟語の構成を考えよう ◆三字以上の熟語の構成を理解	

## (3) TSMの内容充実と活用方法

### ア TSMの内容充実

TSMとは、当該単元において基礎的・基本的な知識及び技能を確実に定着させるための指導者のツール（指導の道具）である。昨年度作成した「基礎的・基本的な知識及び技能の系統表」を基に、授業づくり及び授業中、授業後で活用することを目的にさらに内容を充実させた。

作成に当たっては、当該単元にかかわる9年間の内容の系統や、そこで身に付けさせたい主な知識・技能、指導する上で確認したい既習事項等を盛り込むなどの改善を行った。【資料2】（次項）

【資料2 算数・数学科のTSMの例】

ティーチャーズ スキルアップメソッド

本単元に関する内容の系統(図)

本単元で身に付けさせたい主な知識・技能

指導する上で確認したい既習事項

当該単元にかかわる9年間の内容の系統が分かる。

本単元で身に付けさせたい知識及び技能を把握して、授業を行うことができる。

指導する上で確認したい既習事項が分かる。児童生徒のつまずき状況に応じて活用できる。

授業後の復習で活用し、定着を図ることができる。

イ TSMを活用した授業づくり

TSMの有効性や活用方法を探るために、小学校第4学年において研究授業を行った。指導者には、以下のようなことを意識して活用してもらうことにした。

活用場面	活用の仕方
授業前	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本単元にかかわる内容の系統及び指導内容の把握</li> <li>○ レディネスの把握</li> </ul>
授業中	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 導入段階における既習事項の内容の確認</li> <li>○ 個人思考段階での個別指導における活用</li> <li>○ 単元末における系統性のある次の単元を意識した活用</li> </ul>
授業後	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 定着を図るためにeライブラリ、Web単元評価システムの活用</li> </ul>

授業の実際には、導入段階や展開段階で活用を図った。

段階	主な学習内容及び学習活動	学習形態	指導上の留意点	備考
導入 つかむ (1分)	1 前時までの復習を行う。 ・ 垂直な二つの直線 ・ 平行な二つの直線 ・ 正方形・長方形(辺・頂点)	一斉	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 垂直・平行となる二つの直線の関係を押さえる。</li> <li>○ 正方形・長方形には垂直・平行となる二つの直線の関係はあるのかどうかを考える。</li> </ul>	垂直・直線図形
	2 本時の問題を理解する。 三角形や長方形の紙を重ねると、次のような四角形ができます。どのような仲間に分けられるでしょうか。	一斉	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 問題をイメージさせるために1つの例を実演する。</li> <li>○ 三角形や四角形の紙を重ねてできた四角形を配布し、何を考えればよいのかを確認する</li> </ul>	問題提示用図形
	3 学習課題を考え、理解する。 いろいろな四角形のなかま分けのポイントをさがして、新しい四角形の持ちようを説明しよう。	一斉	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 児童の言葉を生かしながら学習課題を設定し、学習のゴールをイメージできるようにする。</li> </ul>	
見通す (2分)	4 予想する。 ・ 何グループに分けられそうか 5 調べる。 ・ 個人で	個別	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 予想で何グループに分けられるかを考えるようにする。</li> <li>○ 個別指導で長方形の辺の關係に着目させるように助言する。</li> <li>○ 「まず」「次に」「最後に」「なぜなら」「～だからです。」を使って仲間分けの理由を書かせるように助言する。</li> <li>○ 長方形の特徴に気付かせるために困っている児童にTSMを活用する。</li> </ul>	
	知識の活用 長方形の辺は平行の関係になっていること 思考力			

質問形式で示してある既習事項の内容を活用する。口頭で質問したり、カードにして示したりできる。

つまずき状況に応じて、個別指導で確認したい既習事項の内容を参考に指導を行う。

(4) 研究の成果と今後の課題

- 教科と領域を絞り込んだ系統一覧表やTSMを作成したことで、指導者は9年間を系統的に見通すことができ、基礎的・基本的な知識及び技能を理解して、授業づくりを行うことができた。
- TSMを授業の中で効果的に活用することは、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が十分でない児童生徒の手助けとなり個に応じることにつながった。
- 今後、TSMの効果把握しながら、領域を広げる準備を整えていく必要がある。

## 2 活用型授業づくり研究班

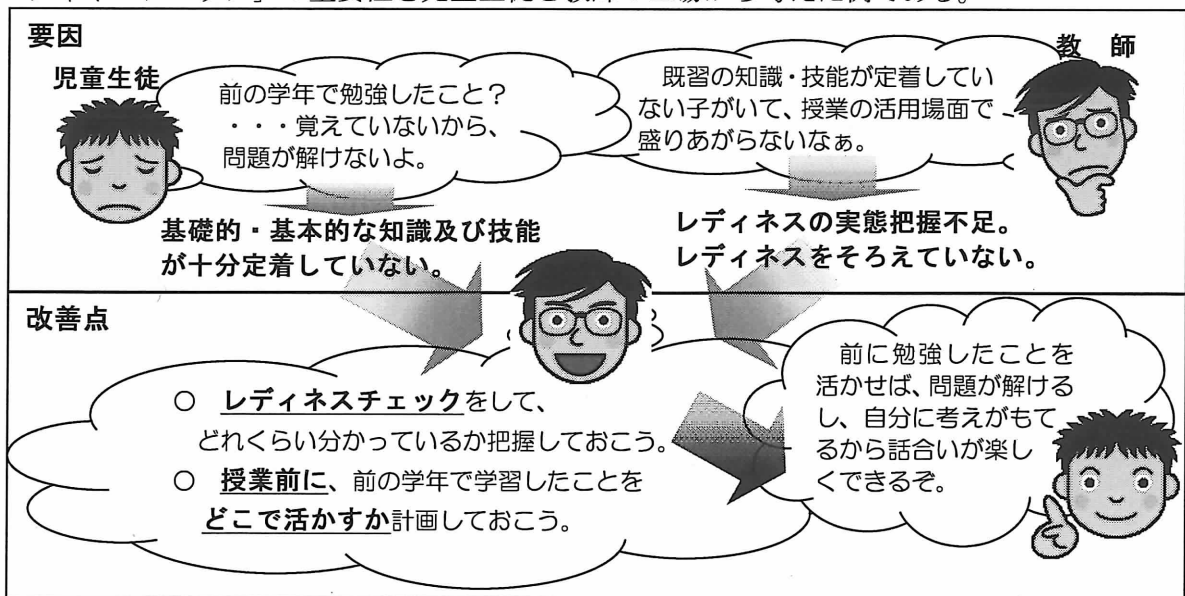
### (1) 理論的研究

#### ア 実態の分析

小林市内の児童生徒の実態として、全国学力・学習状況調査の結果分析より、主として「活用」に関する問題（B問題）が全国平均を下回る傾向が見られた。また、本研究センターの意識調査（昨年度実施）からは、説明や論述などの、習得した知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等が十分に身に付いていないということが明らかとなった。つまり、各教科の授業において、それらの力を身に付けさせる学習指導や内容が十分でないという課題が浮き彫りとなった。そこで、児童生徒の確かな学力を育成するために、日々の授業改善を図ることが最優先課題であると考えた。

#### イ 授業改善の視点

改善の視点を洗い出すために、全国学力・学習状況調査の主として「活用」に関する問題の分析を行った。問題形式は記述式の問題が多く、理由や根拠等をまとめ、一定以上の文字数で自分の考えを論理的に記述することなどを求めている。これらのことから授業改善の視点として、「①レディネスチェック ②課題設定の工夫 ③考える場の設定 ④表現する場の設定 ⑤振り返る場の設定」等が重要であると考えた。以下の図は、5つの視点の中の「レディネスチェック」の重要性を児童生徒と教師の立場から考えた例である。



#### ウ 活用型授業の定義

これらの授業改善の視点を整理し、学習指導要領総則にある「指導計画の作成に当たって配慮すべき事項」等の記述を吟味、考察した。その結果、問題解決的な学習指導過程と活用を図る学習活動の工夫をすることで、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育成することができるのではないかと考えた。そこから「活用型授業」を以下のように定義することとした。

**問題解決的な学習指導過程を基軸としながら、知識・技能を活用する学習活動の充実を図ることで、小林市内の児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育成する授業**

### (2) 実践に向けた実証的研究

#### ア 活用を意識した指導目標・内容の明確化

本研究センターでは授業の計画（構想）段階において「活用型授業」を意識することが、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育成する上で重要であると考えた。その中で、「何

を教えるのか」「どのような力を身に付けさせたいのか」「どのような学習活動を通して身に付けさせたいのか」「何を活用させるのか」など、指導の目標や内容を明確にすることで、目の前の児童生徒の実態に応じた創意工夫あふれる授業を構築することができると考えた。

そこで、まず、当該単元や一単位時間で身に付けさせたい基礎的・基本的な知識及び技能と思考力・判断力・表現力等を明らかにする。次に、活用させる既習の知識・技能をTSM等を使って把握し、指導計画に効果的に盛り込む。さらに、それらを活用する学習場面と活動内容を明確にして授業づくりに活かすこととした。

以下の図は、授業の構想段階における、指導の目標や内容を明確にした例である。

**例) 小4 算数「垂直・平行と四角形（台形と平行四辺形）」**

**○ 活用させる既習の知識・技能**  
 【前学年まで】正方形／長方形(小2「三角形と四角形」)  
 【前時まで】辺と辺の垂直関係／辺と辺の平行関係

**TSMの活用**

習得したこれらの知識や技能を  
**操作活動**や**話し合い活動**という  
 場面で活用することで

**○ この時間に身に付けさせたいこと**  
**基礎的・基本的な知識及び技能**  
 台形や平行四辺形の特徴を理解することができる。  
**思考力・判断力**  
 四角形の辺の平行関係に着目して、3つの四角形(台形・平行四辺形・その他)に分類することができる。  
**表現力**  
 四角形の仲間分けのポイントや新しい四角形の特徴を自分の言葉で説明することができる。

イ 問題解決的な学習指導過程の工夫

思考力・判断力・表現力等を児童生徒一人一人に身に付けさせるためには、主体的に自力解決を図る問題解決的な学習指導過程が効果的である。また、その学習指導過程の中に、既習の知識・技能の活用を図る学習活動を効果的に織り込むことで確かな学力を育成することができると考えた。


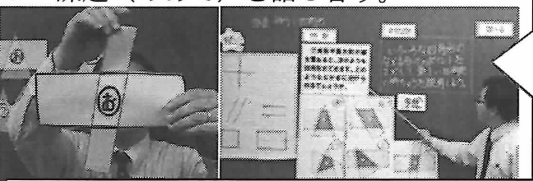
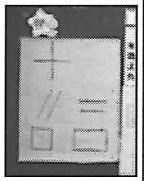
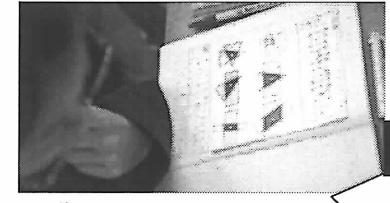

段 階	活用型授業づくりの視点	ねらいと指導のポイント
授業前 導 入	① レディネス チェック	教師、児童生徒ともに学習の準備を整え、既習の知識・技能を活用場面に活かすため、授業前や本時の導入段階で <b>レディネスをそろえておく</b> こと。
導 入	② 課題設定 の工夫	既習の知識・技能の活用を図ったり、主体的な活用場面へ学習を方向付けたりするために、[事象提示(問題)→課題設定→学習活動(考える、表現する)→まとめ] のように <b>一貫性のある課題</b> を設定すること。
展 開	③ 考える場 の設定	児童生徒の思考力・判断力・表現力育成のために、課題を自分ごと(学習の当事者)としてとらえさせ、主体的に <b>粘り強く問題に挑む習慣</b> を付けさせること。また、身に付けた知識・技能を活用して <b>考えに根拠をもって自力解決</b> させたり、 <b>話し合い</b> をさせたりする場を設定すること。
展 開	④ 表現する場 の設定	思考力・判断力・表現力の育成、および学習目標の達成のための表現活動で、身に付けた知識・技能を活用して <b>根拠や理由、感想等を論述</b> したり <b>説明</b> したり、 <b>自分の言葉でまとめ</b> たりする場を設定すること。



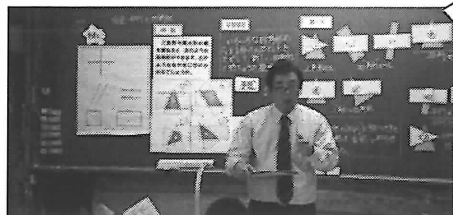
終末	⑤ 振り返る場の設定	既習の知識・技能、生活経験を学習に活かす有用性や必要性に気付かせ、授業において習得した学習内容を次時以降、あるいは他教科や生活場面で主体的に活用する意識をもたせるために、本時の活用に関する学習活動を振り返らせたり、称賛したりする場を設定すること。
----	------------	---

**実際の授業**

**例) 小4算数「垂直・平行と四角形(台形と平行四辺形)」**

段階	学習活動及び学習内容	指導上の留意点
授業前	○ NRT、Web単元学習評価システムの問題、eライブラリを活用して把握する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><b>①レディネスチェック</b></p> <p>○ 本時で活用する既習事項を教師が把握し、特に直線の平行関係については全員の習得状況を確認した。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; float: right;"> <p><b>TSMの活用</b></p> </div>
つかむ	<p>1 前時までの復習を行う。</p>  <p>2 本時の問題を理解する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【問題】三角形や長方形の紙を重ねると次のような四角形ができます。どのような仲間に分けられるでしょうか。</p> </div> <p>3 課題(めあて)を話し合う。</p> 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><b>①レディネスチェック</b></p> <p>○ 2年生で学習した正方形や長方形から、頂点や辺などの基本的な習得事項(用語)の確認をした。</p> <p>○ 前時までに学習した「垂直・平行となる2つの直線の関係」を押さえた。(→活用させる既習の知識)</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; float: right;"> <p><b>TSMの活用</b></p>  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><b>②課題設定の工夫</b></p> <p>○ 問題をイメージさせて興味・関心や学習意欲を高めるために、教師が具体的に操作して見せた。</p> <p>○ 話し合いにより、既習の四角形とは違う新しい四角形の特徴を自分なりに説明できるようにすることを学習のゴールに設定した。それにより、その後の学習活動に目的意識が芽生え、主体性を引き出すことができた。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【めあて】いろいろな四角形の①ななかま分けのポイントをさがして、②新しい四角形の特ちょうをせつめいしよう!</p> </div>
見通す	<p>4 見通し(解き方・答え)をもつ。</p> <p>5 個人で調べる。</p> 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><b>③考える場(活用場面)の設定</b></p> <p>○ 一人一人に予想させ、その根拠を述べさせた。</p> <p>○ その後の自力解決につなげるために、四角形のどこに着目すれば、共通点や相違点が見つかるかを一人一人に考えさせ、5つの四角形が3つの仲間に分けられることを全体で確認した。</p> <p>○ 考えの根拠を明確にもつように指示した。</p> </div>
調べる	<p>6 集団で調べる。</p> 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><b>③考える場と④表現する場(活用場面)の設定</b></p> <p>○ 個人思考と集団での話し合い(3人グループ→斉)の時間を設定した。</p> <p>○ じっくり自力解決する時間を与え、自分なりに考えをもたせ、ノートに理由を書かせることで、その後の話し合い活動が活発になった。</p> <p>○ 個人思考が滞っている児童には、「辺に着目」しているかの確認と、「具体的に比較してみることを一緒にやってみて気付かせた。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; float: right;"> <p><b>TSMの活用</b></p> </div>

深める	7 学習のまとめをする。	<b>④表現する場（活用場面）の設定</b> ○ めあてを読ませ、本時の学習活動を想起させながら、自分なりの言葉でまとめられるようにした。 ○ まとめの書き出しを教師が助言して、学習した内容を活かしながら、その後続く言葉を書かせた。
	<b>【まとめ】</b> <b>①向かい合った辺どうしが平行かどうかを目をつけて仲間わけをする。</b> <b>②台形や平行四辺形の特ちょう</b> ・ 1組の辺が平行な四角形を台形という。 ・ 2組の辺が平行な四角形を平行四辺形という。	
確かめる	8 練習問題を解く。	<b>⑤振り返る場の設定</b> ○ 辺の平行関係（既習事項）に着目し、学習したことを活用することで新たな知識を得た児童の学習活動を称賛した。 ○ 台形と平行四辺形（本時で習得した知識）を次時以降活用することで、新たな知識を習得していく意欲を喚起した。
	9 教師の話を聞く。	



ウ 研究授業の考察から得た今後の手立て  
 活用型授業づくりの視点に沿って研究授業を考察し、より有効な手立てを整理した。

段階	活用型授業づくりの視点	今後の活用型授業づくりにおける手立てと有効性
導入	① レディネスチェック	レディネスチェックで使用した資料を黒板に残しておくことで、その後の活用場面において児童が主体的に課題解決を図ることにつながる。
導入	② 課題設定の工夫	学習のゴールを示すことは、児童が学習の見通しをもって主体的に取り組む効果がある。
展開	③ 考える場の設定	解決の見通しを立てる場面では、根拠を問う機会を設けることで、その後の自力解決や話し合いで児童の思考が焦点化される。 自力解決をする場面では、考えの根拠をノートに書かせるなど、児童の思考を明らかにすることで論理的に考えを進めて、それを説明することができるようになる。
展開	④ 表現する場の設定	考えを説明する場面では、聞き手を意識して教具やICTを効果的に活用しながら説明する技能を高めておく必要がある。 小集団で結論を出すためには、よりよい結論を導き出す手立てが必要である。 学習のまとめを自分で書くという意識をもたせることと、それを習慣化させることが、主体的な学習活動を創り出すことにつながる。
終末	⑤ 振り返る場の設定	既習事項を活用することで、新たな知識を得ることにつながる学び方を意識させる教師の働きかけが必要である。

(3) 研究の成果と今後の課題

- 「活用」に関する問題（B問題）の低調な要因を分析することにより、既習事項を活用することの重要性を意識した授業づくりの基本的な考え方を共通理解することができた。
- 身に付けさせなければならないことや知識・技能を活用する場面を明確にすることで、活用型授業の基本的なスタイルを構想することができた。
- 授業研究を通して、究明した5つの手立ての有効性や新たな課題が分かり、より充実した活用型授業構築のためのヒントを得ることができた。
- 究明した活用型授業を実際に創るための具体的な手順や方法を研究し、市内の先生方に浸透させ、実践を広めていく必要がある。
- 児童生徒の思考力・判断力・表現力等や、教師の授業づくりに関する意識の変容を調査し、今後の研究に活かしていく必要がある。

## VIII 成果と課題

### 1 成果

- 運営委員会で研究の方向性を見直しながら研究を進めたことで、常に研究員が課題解決のために高い問題意識をもって、より実効性の高い研究になるよう取り組むことができた。
- 確かな学力を育成するための授業として、「系統的な指導」と「基礎的・基本的な知識及び技能を活用する授業づくり」という2つの柱に焦点を当てて取り組んだことで、小林市ならではの授業を創造する方向性が明確になった。

### 2 課題

- 市内の各小中学校に浸透する研究を目指して取り組んできたが、本年度は、理論研究や実践研究に時間を費やしたために、各小中学校への周知ができなかった。今後、各小中学校に周知する方法も考える必要がある。
- 今後、系統一覧表やTSMを活用した授業実践や活用型授業づくりの視点をおさえた授業実践を重ね、その手立ての有効性を検証していく必要がある。

### ○ 参考文献

- ・『小学校学習指導要領』株式会社東洋館出版社
- ・『中学校学習指導要領』株式会社東洋館出版社
- ・『第二次宮崎県教育振興基本計画』宮崎県教育委員会
- ・『小林市小中一貫教育基本計画』小林市教育委員会
- ・『9年間で子どもを育てよう 平成21年度研究紀要』小林市立西小林中学校区
- ・『学校改善支援プラン』宮崎県小中学校学力向上検証改善委員会
- ・『平成23年度 調査報告書(第28号)』小林市教育研究センター
- ・『読解力向上に関する指導資料 読解力を高める指導例』文部科学省
- ・『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について』中央教育審議会答申
- ・『知識・技能を活用する力を高める取組の実践例』宮崎県教育委員会

### ○ 研究同人

センター長	佐藤 勝美	(小林市教育委員会教育長)	研 究 員	新名 真紀	(小林市立細野小学校 教諭)
主 事	東 宏太朗	(小林市教育委員会学校教育課教育指導監)	研 究 員	大谷 典夫	(小林市立西小林小学校 教諭)
主 事	畑 中 勉	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研 究 員	郷田 良太郎	(小林市立東方小学校 教諭)
主 事	隈元 正敬	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研 究 員	松吉 啓二	(小林市立三松小学校 教諭)
事務職員	富満 聖子	(小林市教育委員会学校教育課主幹)	研 究 員	山口 浩俊	(小林市立須木小学校 教諭)
主任研究員	山下 健一	(小林市立野尻小学校 教諭)	研 究 員	緒方 裕子	(小林市立紙屋小学校 教諭)
運営委員	一木 季次	(小林市立野尻小学校 教諭)	研 究 員	河野 義和	(小林市立小林中学校 教諭)
副運営委員	岩切 隆人	(小林市立南小学校 教諭)	研 究 員	石神 晶子	(小林市立細野中学校 教諭)
班長(系統)	田口 絹代	(小林市立西小林中学校 教諭)	研 究 員	黒木 良一	(小林市立東方中学校 教諭)
副班長(系統)	秋岡 裕子	(小林市立栗須小学校 教諭)	研 究 員	南村 詠子	(小林市立三松中学校 教諭)
班長(活用)	黒木 義昭	(小林市立永久津小学校 教諭)	研 究 員	曾山 正人	(小林市立須木中学校 教諭)
副班長(活用)	原屋敷 貴子	(小林市立永久津中学校 教諭)	研 究 員	岩崎 香恵	(小林市立野尻中学校 教諭)
研 究 員	山之口 忍	(小林市立小林小学校 教諭)			